平和と美容 03 インタビュー・2

美容は、人をつくる
――その力の大きさを知ろう

明日をも知れない命のときも、飢えや貧しさに苦しんでいるときも、
外部からさまざまな制約が課せられたときも、
創意工夫しながら、あるいは苦肉の策で、人は美容を続けてきた。
人とは、美容なしには生きられない存在。
美容の深さを研究し続けているからこそ、伝えたいメッセージ。

駒沢女子大学教授・資生堂客員研究員　石田 かおりさん

〈図解〉外見を自由に選択し、創ることができる社会の大切さ―。そこに何か外の圧力が入ってきたときは、人権軽視と個人の自由制約の兆候だといえます。

時を超えて美容は続けられてきた

――戦時下の資料などをみると、人々はどんな状況でも何とか工夫して、何らかの美容を実践していますね。

「私は、化粧、髪、爪の手入れ、スキンケアなど人体の表面に加飾・加工する行為すべてを美容ととらえていますが、『人間とは、美容なしには生きられない動物』という定義もできると考えています。

例えば、戦争で明日をも知れぬ命でも、あるいは迫害を受けようと、飢きんが起きて飢えに苦しんでも、政治的圧力で制限が加わっても、人類の歴史が始まって以来、美容は途切れることなく、ずっと続いてきたのです。『資生堂百年史』（1972年資生堂・編）を読んでいると、防空壕の中からすり減った口紅とか、使い古したコンパクトが出てきたと書かれています。

やはり明日の命もわからないようなときでも、口紅やコンパクトを肌身離さず持って、心の支えにしていたことがうかがえます。

毎日毎日続けていたことができなくなった災害の被災者や、介護が必要とされる人なども、化粧や髪を整えることなど、一つでもできれば、日常を取り戻した気分になって、回復のきっかけをつかむ。そんな力が美容にはあります。

時間を超えて、人々は美容をし続けてきた。私はこれを『時間的普遍性』と呼んでいます」

●

「また、美容のない社会はありません。人間の社会に生きる限り、一度も髪を整えたことがない、身体を洗ったことがないなどは考えられません。刺青や瘢痕（はんこん）など各地の民族的な風習なども含めると、何らかの美容は世界中で行われています。

私はこれを『空間的普遍性』と呼んでいます。

また、ご存知のように、英語のcosmosが化粧品の語源です。『宇宙』という意味だと思う人も多いでしょうが、もとは『秩序』という意味です。古代ギリシャは天文学が発達していたので、天体は秩序ある動きをすることが知られていました。宇宙は完全なもので、秩序ある美しいものと考えていました。それゆえ、宇宙の秩序を人体に映すことが美につながり、それが美容でした。

宇宙の秩序を感じ取って、人体で表現することで宇宙に返す。宇宙と人体が呼応し合うのが美容の原義です。だから、宇宙に生きる人間にとって、美容は人間存在の根幹に関わることになります」

外見が自我像を創りアイデンティティにつながる

――本紙の創刊号で『美容の力』について、いろいろお聞きしましたが、外見を自由に選択できるということと、平和の時代はつながりますね。

「そうです。このページに掲載した**図解**を見てください。私の専門である現象学の観点からも、美容は人間の本質に基づくものです。

人間はどんな外見をし、どのように他人から思われていて、どんな性格であるかをおおよそではあっても、自分で自分を追認しています。これが『自我像（セルフイメージ）』です。『自画像』とは違います。自我が像（イメージ）だからこそ、『外見（装い・粧い）』が『自我像』に影響し、それが『アイデンティティ』に直結します。

独裁者はそれを知っていて、外見を強制することで人々を支配します。歴史上よくある例です。

かつて中国の清朝の時代、満州族の風習だった頭髪（辮髪）と衣服を漢族に強制させる『辮髪令』が出されました。漢族には辮髪は大変な屈辱でしたが、従わないと首をはねられることもあり、従わざるを得なかった。このように外見の支配が政治的に利用されるわけです」

“自粛”が“他粛”に変わるとき

――太平洋戦争では、国民が自粛していくことで、自ら制約を課している現象も起きています。

「戦時下はお互い同士が監視しあい、密告しあうような空気ができていました。戦時にふさわしくない服装や髪形、お化粧や爪の色まで密告されて、取締りの対象になっていました。

それでも苦肉の策で自家製化粧品を作るなど、さまざまな工夫で美容が続けられていた記録は残っています。

自粛というのは、本来は自分の意志で決めて、自分の行動範囲で実施することです。いい方向に働けば、震災の避難所で我慢強く順番待ちするとか、皆で食料を分け合うとかの行動になります。逆に悪い方向になると、“自粛”が“他粛”になり、大きな圧力になって、社会全体が非常に息苦しくなってきます」

美容の力を知ること

――美容業に携わる、あるいは関わる人へのメッセージは？

「ことわざ『馬子にも衣装髪形』は世界各地にあり、多くは『服は人をつくる』と直訳できます。服や美容の外見が人をつくることは、人類が古くから知っているのです。

美容の力は、上手に使えば、自己解放できて、本来の自分を取り戻し、さらに社会に参加したい人の背中を押してあげる力にもなります。

しかし、使い方を間違えると、独裁国家による強制とか、圧力的な空気を含む自粛とか、人を支配する、あるいは自我をすべて殺してしまい、権力者の使い良い人間に育て上げていくように悪用された例も、歴史上、多々あります。

美容の力にはオモテとウラの両面があることを、美容に携わる人、あるいは関わる人は、ぜひ、知ったうえで仕事をしていただきたいと思います。

そもそも美容産業は平和な時代でないと成り立たない。そのことを認識したうえで、いい方向に使って仕事をしていただきたいですね」

プロフィール

駒沢女子大学教授、資生堂客員研究員として、哲学の方法による化粧文化や身体文化の研究で被服環境学博士取得。「“きれい”を学問する」をコンセプトに日本舞踊藤間流師範名取を活かした授業や、資生堂の協力を得た化粧実習の授業も好評。学問分野としての「化粧文化」や、価値観としての「スロービューティ」の提唱と普及活動に努める。著書は「化粧せずには生きられない人間の歴史」など多数。

※この記事は Beauty Opinion & Communication Club の提供です。
問い合わせ先：駒沢女子大学・駒沢女子短期大学　IR・広報部　prkomajo@komajo.ac.jp

この画像は、当該ページに限って Beauty Opinion & Communication Club の記事利用を許諾いただいたものです。